

SDGs

なめりかわ

- あとがき -

今回の滑川での取材を通して私たちは、SDGsが持つ意味を知り、必要性を強く感じました。もし、このSDGsという「ものさし」がなかったら、今回の私たちの取材は、なにか漠然とした発信で終わってしまったと思います。しかし、SDGsという「ものさし」があることで、私たちはゼミ生同士、取材先の方々と共通の視点で話を深めることができました。各取材先の取組みに、SDGsの「ものさし」を当てることによって、それぞれの仕事とSDGsの何番にリンクしているかを可視化できました。些細なこととは思いますが、これが私たちの今回の成果だと思います。引き続きこの「SDGsのものさし」を使い、後輩たちが、滑川市の各ゴール達成への進捗と深度を客観的に次年度も発信していきます。取材を通して愛着が出てきた滑川がよりよい社会になればいいな、と思いました。

武田尚恭ほかゼミ生11名

- 謝辞 -

この事業は大学コンソーシアム富山地域課題解決事業（滑川市）および、富山県立大学地域志向教育プログラムとして、滑川市への移住促進を目指し、1年教養ゼミ（清水ゼミ）の学生が、平成29年度より毎年取組んでいます。関係機関、滑川市民の方々、企業・団体のご理解ご協力に感謝申し上げます。

- 協力 -

株式会社 プロジェクトデザイン / NPO 法人ナメリカワデザイン / 株式会社 笑農和 / YKKAP 株式会社 滑川製造所 / 日本カーバイト工業株式会社 / 株式会社 公生社 / 有限会社 サンワ / 富山県農林水産総合技術センター水産研究所 / 早月川沿岸土地改良区 / 滑川市教育委員会 / 社会福祉法人 滑川市社会福祉協議会 / 滑川市市民健康センター / 富山県立大学学生アシスタント (順不同)

- 企画・制作 -

公立大学法人 富山県立大学

- 制作サポート -

一般社団法人 環境市民プラットフォームとやま (PEC とやま)

- 発行 -

滑川市役所企画政策課

令和2年1月



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

- もくじ -

はじめに	2
滑川市内のSDGsの取り組み	
株式会社 プロジェクトデザイン	3
NPO法人ナメリカワデザイン	5
株式会社 笑農和	7
YKKAP 株式会社 滑川製造所	9
日本カーバイト工業 株式会社	11
株式会社 公生社	13
有限会社 サンワ	15
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	17
早月川沿岸土地改良区	19
滑川市教育委員会	21
社会福祉法人 滑川市社会福祉協議会	23
滑川市市民健康センター	25
あとがき	26

- はじめに -

SDGsとは「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」の略称です。SDGs（エス・ディー・ジーズ）と読みます。最後の”s”はGoals（ゴールズ）の”s”、ゴールは複数あることを表します。SDGsは2015年9月の国連サミットで、193か国の全会一致で採択され、2016年から2030年の15年間で達成するために掲げられた17の目標です。17の目標と目標達成に向けた具体的な目標と手段の169のターゲットで構成されています。近年、地球温暖化をはじめ、世界の課題は複雑、深刻化しています。このまま放置すると地球の存在が危ういと状況だとされています。SDGsは、「地球上の誰一人

として取り残さない（Leave No One Behind）」社会の実現を目指しています。今回は、この理念に基づき動きだしている滑川市内の企業・団体を、富山県立大学1年の清水ゼミの12名が滑川市役所職員2名と12のチームを組み、学生目線で取材しました。

富山県立大学 教養教育センター准教授
清水 義彦





アイデアは現実世界から

「現実世界はゲームを制作するためのアイデアの宝庫です」とは、(株)プロジェクトデザイン社長である福井さんの言葉です。現実の世界と問題をよく観察し、それらをゲームに落とし込むことで、「2030SDGs カードゲーム」のようなヒット作ができるそうです。ゲームを通して、プレイヤーは実際の問題とその解決の方向性をシミュレーションでき、ゲーム後は行動を振り返り気づきを深化できる、これがこの会社が制作するゲームの醍醐味です。(株)プロジェクトデザインは、「生まれたまちに恩返しをしたい!」という福井さんの熱い思いから、ここ滑川で設立された会社です。



SDGs の4「教育」とカードゲーム

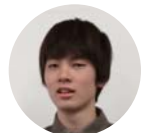
福井社長は、企業や大学のコンサルティングを手掛けた際、人を育てることに魅力を感じ、SDGs の 17 の目標のうち 4 番「質の高い教育をみんなに」を題材にカードゲームを創りました。「カードゲーム形式であれば、気軽に取り組むことができ、勉強という意識ではなく、遊び感覚で楽しく学ぶことができる。たくさんの方が一度の機会と一緒に学ぶことのできるビジネスゲームを作りたかった。年齢や経験、言葉の違いも乗り越えることができるのがカードゲームのいいところ。」という福井社長の言葉が印象に残っています。(株)プロジェクトデザインでは、「2030SDGs」や「The 商社」をはじめとした多様なカードゲーム方式のビジネスゲームを開発されています。

地方にいてもできる!

「どうせ起業するなら生まれたまちで。損得を超えた何かに導かれるように小さな事業をはじめました。」とは、Facebook での福井社長の言葉です。取材では、「滑川の発展のみを考えるのではなく、地方の発展を通じて、日本をどのようにしていきたいかを考えることが大切。日本全国の各地方に力のある人を育て、地方から国を押し上げていくことで日本全体が良くなっていくようにしたい。」とおっしゃっていました。だから、福井社長は、「まず自分自身がそうありたい」という思いのもと滑川を拠点に精力的に活動を行っていらっしゃるのだと思いました。取材中、福井さんの携帯電話への着信の頻度や会話の雰囲気から、地方にいても都市部の大企業と SDGs や地方創生をはじめ様々な事業で対等に協働できると知りました。

GOOD DESIGN AWARD 2019 特別賞受賞

「SDGs de 地方創生カードゲーム / 書籍:持続可能な地域の創り方」で、グッドフォークス賞(地域社会デザイン)を受賞されました。特別賞は滑川では初の受賞と聞きました。県内で見ても 2 件目の快挙とのことですよ!



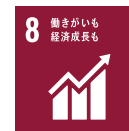
取材 高野響一

社名:株式会社 プロジェクトデザイン
所在地: 富山県滑川市田中新町 25 番地
HP: <https://www.projectdesign.co.jp/>



TRIO

ビジネスマッチングでイノベーション



コワーキングスペース「TRIO」

「TRIO」は新たなビジネス拠点として、コワーキングスペースを貸し出す会社です。コワーキングスペースとは、インターネット環境・各種事務器具・打ち合わせスペースなどの事務所機能を共有しながら、各々が独立した仕事を行うスペースのことを意味します。また、利用者同士のビジネスマッチングも起こりやすいビジネス的な出会いの場でもあります。代表を務める桶川さんのこれまでの経験や人脈を活かし、起業のサポートや事業者同士の間に入ってマッチングも行なっています。桶川さん自身も「TRIO」を運営することによって、これまで知り合いでなかった人と今までなかった繋がりを持たせたことが新しい発見だとおっしゃっていました。

「TRIO」の誕生とこれから

3年前に、市の地方創生事業の一環として、市とともに地元滑川の賑わい創出を検討する中で、幼稚園の保護者を中心とする仲間内から挙げた案をきっかけとしてスタートしたのが「TRIO」でした。今では、プログラミングをされている方やECサイトを制作されている方、会計士など6人の方がビジネス拠点として、利用されています。利用者さん同士のビジネスマッチングが起こったり、事業者同士をマッチングしたりして新たな事業が生まれているとおっしゃっていたので、今後大きな成果を上げてくれるのではないかと感じました。



「TRIO」とSDGsの関わり

今回の取材を進めていくなかで、市との協力であったり、利用者同士のビジネスマッチングであったり、事業者同士をマッチングしたりとさまざまな場面で、SDGsの17番「パートナーシップで目標を達成しよう」に繋がるものがあると感じました。パートナーシップを築いていくうえで桶川さんは、「相性がとても大切で、うまくいきそうな人たちをマッチングすることやうまくいくように寄り添って伴走していくことが大事」とおっしゃっていました。これはとても大切なことで、誰もが見習ってやっていくことができるだろうと感じました。また、会社だけでなく「TRIO」で自分の仕事について考えることで、利用者同士のパートナーシップにより新たなイノベーションを生み出すきっかけとなるなど、SDGsの8番「働きがいも経済成長も」や、9番「産業と技術革新の基盤をつくろう」にも繋がっていくのではないのでしょうか。

社名：特定非営利活動法人 ナメリカワデザイン
所在地：滑川市常盤町1117-2
HP：<http://trio.namerikawa-design.org/>

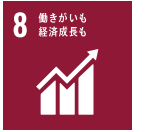


取材 山北謙信



株式会社 笑農和

笑農和の考えるこれからの農業



笑農和って何をしている会社？

(株)笑農和は「100年後もおいしいお米を食べられる未来へ 孫世代に産業として確立した農業を残す」をサービスビジョンに掲げた、スマート水田サービス「paditch (パディッチ)」の農業コンサル事業を行っている会社です。日本の農業のこれからを考え、ITを使った農業の開発を目指しています。



未来を見据えた米作り

笑農和代表取締役の下村さんは、農業業界そのものの仕組みに疑問を感じ、これからの農業ではITが活躍できると考えました。今後は、農業に必要不可欠な「人の数」が足りなくなるといった問題に対し、農業で活躍できるロボットなどを取り入れ、農業の負担を減らし、少人数で大規模な農業を可能

にすることが目標です。笑農和は、人手不足を解決するために「paditch」という米農家が一番負担に感じている水管理を自動化するIoT型の水門やバルブを開発しました。「paditch」の開発により持続可能な農業の実現に近づくことができ、これが確立されれば、農業に費やす時間と手間が減り、農作物に困ることが減ると考えられます。これらはSDGsの2番「**飢餓をゼロに**」のゴール達成につながっていくと思います。



社員のモチベーションを大切に

笑農和では、社員のモチベーションも大切にしており、可能な限り社員を優先することを意識しているそうです。リラックスができて意見交換もしやすい作業スペース、休暇の自己申告制やキックオフ会議の導入、社員が自分自身の価値について会社にメリットがあることをプレゼンすれば、給料を上げるといった制度を行っています。これらのことは、SDGsの8番「**働きがいも経済成長も**」のゴール達成につながっていると思います。

SDGs との関連

下村さんは、2年ほど前からSDGsに興味を持ち、インドネシアのバリ島にあるグリーンスクールに見学に行かれました。グリーンスクールではSDGsを意識しており、校舎が竹でできていて、学内で農業なども行っているそうです。その経験からSDGsについて深く知り、農業への意識もより強くなったと言っておられました。笑農和の目指しているところは上記のようにSDGsの2番「**飢餓をゼロに**」と8番「**働きがいも経済成長も**」というゴールに近いと言っておられました。



地球にやさしい農業

下村さんは、過剰に化学肥料を使うことに反対だそうです。現在、化学肥料は農産物の収穫量を増やす方法として多くの農家に使われていますが、化学肥料が土に及ぼす悪影響はあまり知られていません。この状況を正すために、どういった悪影響が起こるのかわかってもらうこと、そして可能ならば地球環境にやさしい循環型の肥料を使い農業を行うことができれば、地球にも優しいと言っておられました。

社名：株式会社 笑農和 (えのわ)
所在地：滑川市上小泉 1797-1
HP：https://enowa.jp/



取材 金戸綾汰



YKKAP 株式会社 滑川製造所

ものづくりとSDGsの関係



樹脂窓による環境配慮

YKK AP では環境へ配慮したいくつかの取り組みを行っています。CO₂の削減や、製造過程の省エネ化などがありますが、その中でSDGsにもとづき、私が注目した取り組みは樹脂窓の製造です。樹脂窓の最大の特徴は断熱性能が高いということです。日本の窓のフレームの多くに使われているアルミはとても熱を通しやすいため、夏には熱が入り込み、冬には熱が逃げてしまいます。その結果冷暖房を使用し、省エネ化の妨げになってしまいます。そこでYKK APでは断熱性能の高い樹脂窓を開発し、普及させることによって小さなエネルギーで快適に暮らす「ローエネ暮らし」を提案しています。この樹脂窓が省エネ化を実現し、SDGsの7番「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」と13番「気候変動に具体的な対策を」のゴール達成につながっています。

地域への貢献

滑川製造所では地域に貢献する取り組みを行っています。1つ目は工場での地域への配慮です。例えば、柵の一部に近くの田んぼへの害虫対策のための防草シートを設置したり、使用する水の量を削減したりすることに取り組んでいます。2つ目はイベントを通じての地域への貢献です。滑川製造所は滑川市環境フェアというイベントに出展し、実際の商品や説明資料を通して地域の方々にYKK APのものづくりを紹介しています。YKK APは

地域の方々や自然を大切に、様々な政策を行うことで事業の成長へとつなげています。

この取り組みはSDGsの11番「住み続けられるまちづくりを」のゴール達成に関連します。地元の人たちのことを大切に考え政策を行ったり、イベントに出展したりすることは人々にとって住みやすい街になると思います。



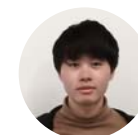
高い技術のものづくり

YKK AP最大の特徴は一貫生産を用いた高い技術でのものづくりです。一貫生産とは、材料から製造設備、製品までを自社で開発・生産することです。世の中ではそれぞれ違う企業がそれぞれ違う部品・工程を担当するのが一般的ですが、YKK APではその逆の動きをしています。ではなぜ、一貫生産をすることが良いのでしょうか。その理由は自分たちですべて開発し、生産するため独自の技術が特化していくからです。また、すべて自社で開発・生産しているため、どの国や地域に工場を置いてもその品質を維持することができます。また、様々な国や地域でものづくりを行うため、それぞれの気候に適した製品を開



発することができます。その他には一貫生産をすることによって部品などの輸送を行う必要がないため、排気ガスなど輸送をする中で環境に与える悪影響をなくすることができるという利点があります。この取り組みはSDGsの12番「つくる責任、使う責任」の達成に向けての取り組みです。ものを作るにあたって、高い品質であるということはとても重要です。YKK APの高いものづくりの技術は、つくる責任というものを果たしていると思います。

社名：YKKAP株式会社 滑川製造所
所在地：富山県滑川市杉本 3003
HP：<https://www.ykkap.co.jp/>

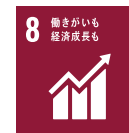


取材 生駒敦己



日本カーバイド工業 株式会社

身近にある SDGs



日本カーバイド工業株式会社が行っている SDGs

(株)日本カーバイド工業は会社としては、SDGsの11番「住み続けられる街づくりを」達成に関係する活動を行っています。年に2回市内美化運動の一環として、社員が早月工場周辺の美化活動を実施し、創業の地である魚津市で「たてもんの森」プロジェクトに寄付しており、社員も植樹祭に参加しています。この11番「住み続けられる街づくりを」達成を目指すプロジェクトはSDGsが始まるずっと前から(株)日本カーバイド工業が行っている活動です。SDGsがあるからこのような活動を行っているわけではなく、地域のため周りのひとたちのために行っています。



だれのための SDGs

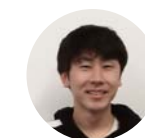
- ①工場内で使用される電気、水、燃料などの使用量を削減する。
- ②社員の有給休暇取得率を高くする。

これはどちらも(株)日本カーバイド工業が行っていることです。この一見何の関係もないように見える2つですが①はSDGsの12番「つくる責任、つかう責任」②は8番「働きがいも経済成長も」達成に関連しています。SDGsはだれのためであるかが違うだけですべて何かをよくするためにあります。①は環境にとって、②は社員にとってよい企業であるための要素です。企業がSDGsの達成を目指すことで、その活動を通してよりよい労働・自然環境がつけられることにつながります。また、SDGsの達成を目指す会社が増えることで、よりよい世界の構築につながるのだと思います。だから今SDGsが世界で求められているのだと思いました。

日本カーバイド工業株式会社とは

(株)日本カーバイド工業は1935年に富山県で創業しました。液晶パネルに使用される光学フィルム用粘着剤や各種電子部品のベース基盤となるセラミック基板、道路標識に使用される反射シート等幅広い製品を展開しており、私たちの生活に溶け込んでいます。日本カーバイド工業ではもともと社名にも入っているカーバイドを原料としたアセチレン誘導工業のパイオニアとして創業しました。その後、事業の再構築を行い、現在では樹脂重合技術、フィルム・シート技術、焼成技術を軸に様々な製品・サービスを提供する企業グループになりました。(株)日本カーバイド工業は顧客のことを常に考えており、必要とされるものが何か、それを作るためにはなにが必要かということを考えています。

社名：日本カーバイド工業株式会社
所在地：富山県滑川市大島 530
HP: <https://www.carbide.co.jp/>



取材 宮田英寿



株式会社 公生社

滑川市の水、海をきれいに



滑川市の海をきれいに



(株)公生社は、美しい環境を守るという責任を自覚し、持続可能な循環型社会を形成するために事業活動として環境保全への取り組みを推進しています。事業の一つとしてSDGsの6番「安全な水とトイレを世界中に」に関連して、浄化槽という水質汚濁防止に大きく寄与する大切な設備の保守点検清掃や高圧洗浄による配管内部の清掃を行い、汚れや詰まりの原因を取り除く事業を行っています。日常生活等により発生する汚水の処理施設である浄化センターの維持管理などを行い、安全な水の維持に大きく貢献しています。特に、浄化センター出張所の社員の皆さんは、課長の小幡さんを中心に、海をきれいにしたい、そして、滑川市をきれいにしたいという思いがあります。

現状の滑川市

小幡さんは、環境の面では滑川市をきれいにする、特に水処理の面では先にも記述したように、海をきれいにしたいとおっしゃっていました。SDGsの6番「安全な水とトイレを世界中に」に関しては、水のきれいな日本では、ほかのゴールと比べると関心が低く、予算もあまり多くない現状だそうです。滑川市も水処理にかけられるお金には限りがあるそうです。しかしそんな中でも小幡さんは、「よりよい水を出せるような管理をしていきたい」とおっしゃっていました。そのためには、滑川市民の方々が汚水を排出する際には、決められたルールをしっかり守るなどの協力が必要だそうです。いまでもまだ浄化センターには

流れてきてはいけないものが流れてくることがあるそうです。そのような事があると、その処理費用として余分なお金が必要となり、水をきれいにするために本来使われるはずだった予算がきれいな水へは回らなくなるそうです。

大切なのは市民の協力

課長の小幡さんは釣りが趣味ということで、よく職場の近くの海に釣りをしに行くそうです。その海を見てきれいに保てていると自分の仕事がしっかりやれているとやりがいを感じるそうです。逆に汚れていると、何か水処理に問題があったのではないかと常に気を配っていらっしゃいます。そういったことにやりがいを感じる小幡さんをとても素晴らしいと感じました。小幡さんは、「人間は出て行くものに対してあまり意識を向けたがらない。自分の家から出ていく水には人々は関心を持たない人が多い。」とおっしゃっていました。私は、その言葉に強く胸が打たれました。水をきれいにするには、市民の協力が不可欠だと気づきました。そして私たちも水をきれいにする努力が必要だと思いました。滑川市の海からきれいにしていき、いずれは世界の水をきれいにしていこうとする(株)公生社の姿に今後大きな成果が上がるのではないかと感じました。



社名：株式会社 公生社
所在地：富山県滑川市栗山 3596
HP：http://www.kohseisy.jp/

取材 出越蓮



有限会社 サンワ

地域間のコミュニケーションに
重きを置く不動産会社



SDGsとの関係性

日々不動産業を営んでいる(有)サンワは、SDGsの11番「住み続けられるまちづくりを」と4番「質の高い教育をみんなに」という2つのゴール達成に取り組んでいます。(有)サンワは、家を売るだけでなく地域の今後のことについてもしっかりと考えています。SDGsの17のゴールは、あくまでも理想であり現実問題としてかなえることは難しいとおっしゃっていましたが少しでも理想に近づけるように、家を売るというビジネスを通じてより良い世の中の実現を目指している会社です。



利益よりも大事なことは

(有)サンワは、不動産業を営む際に特に入居後の地域間のコミュニケーションを大切にしている、そのために空き家の仲介業を行っています。古くなったり家主がいなくなったりして空き家となった家の売買をするのが不動産会社の仕事と思っている人もいるかもしれませんが、(有)サンワは他社とは異なると感じました。地域密着

の不動産会社として「街を廃れさせていきたくない」、「近所に住んでいる住民たちとコミュニケーションをとれる人がいてほしい」、「家に生きていてほしい」という強い思いがインタビューの中感じられました。この思いは、SDGsの11番「住み続けられるまちづくりを」につながると感じました。

サンワが担う地域での役割

(有)サンワは、これまでに何年もかけて商業施設や薬局など地域にとって必要な店舗を誘致してきました。(有)サンワの仕事は、直接滑川市に住む人と関わるので、今この滑川市に何が必要かを一番理解している会社でもあります。だからこそ、この会社は滑川を今後より住みやすく、安心・安全で地域間のコミュニケーションが盛んな街として創り

上げていく大事な役割を担う存在になりえるはず。この役割、会社の存在こそが、SDGsの11番「住み続けられるまちづくりを」達成の原動力になると思えました。

目指すのは地域で行う子育て

(有)サンワのもう一つの想いは、「子供を見守って育てていく雰囲気のある地域を作ること」です。今の社会にみられる隣の家の人の名前すら知らないという様な関係ではなく、近所の人の健康や安全にも気を遣えるようなお互いに助け合うことができる関係を作りたいと願っています。そのためには、子供たちに勉強だけでなく、思いやりや人との接し方を教えていく必要があります。今の親たちは、子どもたちに勉強は熱心に教えるけれど、マナーや他人への接し方などの基本となることは少し手薄になっているところも見受けられます。そのような問題の解決を親だけでなく地域みんなのできる街づくりという思いが(有)サンワから感じられ、SDGsの4番「質の高い教育をみんなに」というゴール達成につながると感じました。



未来を見据えて

今回取材させていただいた(有)サンワが、いかに地域や未来のことを考えているかということがよくわかりました。自分達の利益だけではなく多くの人の幸せを願う会社が増えることは、SDGsの17のゴール達成に深く関係があると思います。今後もビジネスを通して、快適に住み続けられる滑川のため活動し続けて欲しいと思えました。



社名：有限会社サンワ
所在地：滑川市上小泉 2834-1
HP：<https://www.fudousan-sanwa.co.jp/>

取材 高橋優介



富山県農林水産総合技術センター水産研究所

富山県水産研究所と環境



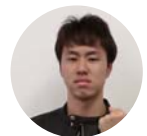
歴史ある漁業

今回、私は辻本課長に、SDGsの14番「海の豊かさを守ろう」に関わる富山県水産研究所の取り組みを取材しました。海の問題というと、1つに乱獲による魚の減少があげられます。富山県水産研究所では、その問題に対して2つの取り組みをしています。1つは、過去のデータを参考に漁獲量の制限をしています。そのことを資源管理漁業といいます。漁獲量を制限することで乱獲を防ぎ、魚の減少を抑えるだけでなく増加させることも可能です。この取り組みは長年続けられています。2つめは、漁船の制限です。漁獲量の制限だけでなく船の数も減らすことで漁獲量を調整します。それでは漁師の収入が減ると考えましたが、辻本課長によると、漁獲量の制限をすることで魚の単価が上昇するため収入には大きな問題はなく、制限することで安定した収入を得ることができるのだそうです。それにより近年、富山県では若い漁師が増加しています。また、辻本課長は「水産業界では、海を守る取り組みは昔から行われている。SDGsはそれに乗っかってきたという感覚でいる。」とのこと。今後の全国的な取り組みとしては、今、水産資源量が評価されている魚の数が50系群とのことですが、その数を200系群に増やすことだそうです。上記の取り組みは、SDGsの14番「海の豊かさを守ろう」のゴール達成に関わっていると思います。



海洋深層水の取り組み

海洋深層水とは、水深200m以深降にあり、太陽光が届かないため水温が約2℃に保たれています。細菌や化学物質による汚染も少なく、窒素やリンなどの栄養塩を豊富に含んでいて、水産研究所では深層水をくみ上げて様々なことに使っています。1つ目は研究のためです。深層水域で暮らす魚はたくさんいます。そのような冷水性の魚を陸で研究したい時に深層水を使用することで、海の中の生活を再現しています。深層水を使用したことにより、サクラマスやベニズワイガニなど多くの魚の生態を知ることができました。2つ目に、冷房に使用しています。深層水を魚の研究に使用するとき、パイプ管などを通して空気が冷やされて冷房効果になります。3つ目に、水産研究所では、多段式養殖システムを研究しています。これは深層水がもつ栄養塩と魚や貝から発生する排泄物を用いて、海藻や魚の養殖を行うことです。魚や貝の排泄物を含んだ深層水を次の水槽に段々と移していくことから、多段式養殖システムといわれています。エゾアワビやマツカワは排泄物を出し、マコンプは多くの栄養塩を吸収しています。このように深層水をより効果的に使う研究も行っています。他にも深層水は、ハワイなどでは発電にも用いられています。このように深層水を使った取り組みはSDGsの7番「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」のゴール達成に今後つながっていくかもしれません。



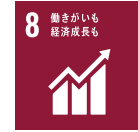
名称：富山県農林水産総合技術センター 水産研究所
所在地：滑川市高塚 364

取材 武田尚恭



早月川沿岸土地改良区

早月川の小水力発電



早月川沿岸第一発電所の概要

私は近年、注目されている小水力発電について取材しました。今回、私が取材させていただいたのは早月川沿岸土地改良区が運営する早月川沿岸第一発電所です。早月川沿岸第一発電所は、鋤川用水路の左岸側上流の取水口から発電所まで約 900m の水圧管路を用いて最大流量 4.26m³/s を流し込み、有効落差 17.88m を利用して最大出力 530kW を発電する流れ込み式の小水力発電所です。運転が開始されたのは平成 27 年 6 月です。



小水力発電の需要

昭和の時代が終わると日本は本格的に地球温暖化対策における CO₂ の削減に取り組み、非化石エネルギーへの関心は大きくなっていきましたが、この時点では小水力発電の需要は小さく、小水力発電事業に着手する事業所はほとんどありませんでした。東日本大震災によって引き起こされた原子力発電所事故を契機にエネルギー政策の見直しが行われ、再生可能エネルギー特別措置法（固定価格買取制度）が施行されたことでエネルギーの買取価格が高くなり、小水力発電に着手する事業所が増えました。

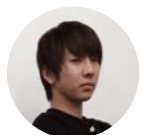
SDGs との関連性？

私の取材テーマは、SDGs の 7 番「エネルギーをみんなに、そしてクリーンに」と早月川の小水力発電の関連性でした。温室効果ガスを排出せず、環境への負担が少ない早月川の小水力発電はこのテーマに沿っていると思いました。またお話をうかがって他にも SDGs に関わるものがあると思いました。13 番「気候変動に具体的な対策を」と

8 番「働きがいも経済成長も」です。13 番「気候変動に具体的な対策を」については、川の水量や雪解けの時期によって発電量が左右される流れ込み式ですが、気象データなどから雨量や雪解けの時期を予測して気候変動に対応することが可能になると、今よりもっと重要な発電方法になると思いました。また 8 番「働きがいも経済成長も」については、そこに川が流れていれば施設の建設費と維持費だけで安定してエネルギーを生み出せるので、その発電収入を活用して地域の経済成長にもつながると思いました。

小水力発電の将来性

今回の取材で私は今まで知らなかったことを多く知ることができました。早月川沿岸土地改良区の事務所の方が丁寧に小水力発電の歴史について教えてくださいました。小水力発電の始まりは農業用水だと知り、とても驚きました。規模は違うけど変わらないやり方、仕組みで行われ続けてきました。身近な水路を利用してエネルギーに変えるという発電方法は環境にほとんど影響を与えないので、再生可能エネルギーとして有効な小水力発電は今後世界中で注目されていくのだらうと思いました。



名称：早月川沿岸土地改良区
所在地：富山県滑川市野町 1684-3

取材 堀田遥斗



滑川市教育委員会

質の高い教育を支え地域を学びの場へ



質の高い教育環境が整った滑川

滑川市では、算数、理科の備品整備を進め、国が求める100%の備品の整備がされています。また、全小中学校に実物投影機、プロジェクター、スクリーンのICT3点セットを配置し、「わかりやすい授業づくり」に努めています。これらの取り組みにより、言葉で理解することが難しい内容も、図や絵で示すことで、子どもたちの理解を深められるようにしました。そして、備品を有効活用できるように教員の研修も行っています。コンピュータやICTの使い方を教えるコンピューターコーディネーターを2人雇い、授業の支援を行っています。また、理科の実験では大学生が教員の補助に入る試みや理科の実験観察の研修会を行い指導者の質を高める場を設けています。滑川市の教育センターでは、どの学校でも同じ質の学びができる取り組みを行っています。この活動は、SDGsの4番「質の高い教育をみんなに」のゴール達成につながります。



この活動は、SDGsの4番「質の高い教育をみんなに」のゴール達成につながります。

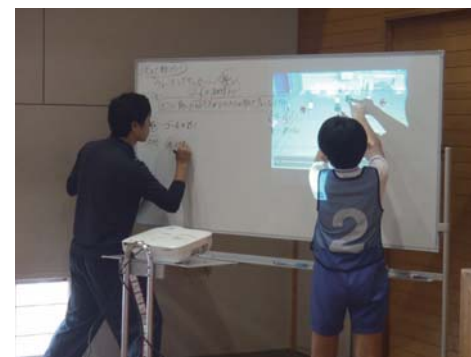
みんなが学べる

滑川市では、特別な支援を必要とする子供にもしっかりと教育が受けられる活動を行っています。特別な支援が必要な子供には、備品の整備を進め、教員には研修会を行い、日々の生活で特別な支援が必要な子どもの理解を深めるようにしています。また、特別支援教育支援員「スタディ・メイト」を配置し、通常の学級では学習や生活が困難な子供に、個別の支援も行っています。さらに就学指導では、小中学校のつながりをよくして1人1人に適切なまなびの場を保障できるようにしています。最近では、幼稚園・保育園と小学校の連携した取り組みを始めています。特別な支援を必要とする子供のことを理解し、公平

教育を行っています。この活動は、SDGsの4番「質の高い教育をみんなに」の「みんな」を重視しなおかつ、10番「人や国の不平等をなくそう」の達成に向けた大事なステップだと思えます。

滑川の独自の教育「科学の時間」

滑川市が「理数科学ものづくり教育」のために平成29年度から市独自の教育課程として、一般の理科とは別に「科学の時間」という時間があります。この時間では、滑川市の特色や科学のことを学んでいます。滑川市は「ものづくりのまち」といわれ、工業が盛んであり、そして豊かな自然に恵まれています。地元の自然を教材に取り上げることで、教科書では学べないことも学ぶことができます。また小学校5年生では企業見学があり、企業見学に協力的な企業が多いのも特徴です。また、滑川の地形を学ぶため海から滑川を見るクルージングの行事もあります。このような活動が行えるのは、地域の人々が子供の教育に協力的であるからです。地域を深く知ることで地域に愛着がわき、故郷を、滑川を愛する心の



育成につながっています。この活動は、地域・企業・行政の連携により実現できることであり、SDGsの17番「パートナーシップで目標を達成しよう」につながります。

名称：滑川市教育委員会
所在地：富山県滑川市寺家町104



取材 高尾宜伸



滑川市市民健康センター

子供の成長をずっと見守る健康センター



妊婦さんに安心を

今回は、健康センターの丹羽さん、櫻井さんにお話を伺ってきました。そこでは母と子の健康を考えた様々な施策が行われていました。

まずは妊娠期です。妊娠届を健康センターに持ってきてもらうところから健康センターと親御さんとの関わりが始まります。そこでは母と子の成長・発達を記録する「母子健康手帳」を交付するだけでなく、心身状態や生活等の聞き取りや安心して妊娠期を過ごせるよう情報提供や相談を行っています。また母子の健康を守る施策として「妊婦健康診査」は医療機関で一人14回行われ、その後健康センターに結果が送られ、健康状態を確認し、必要時訪問等を行っています。

更に平成27年度から市の子育て施策の一環として経済支援を目的とした「マタニティ応援手当」を行っています。これは妊娠16週以降妊婦を対象に手当(1万円)が支給されるものですが、センターで面談し、母親の体の状態やお子さんの成長、不安などを聞き、健康管理や栄養面の助言を行い、何か問題があればまた会う機会を設けたり、出産医療機関と情報共有を図りながら出産に向けた支援を行っています。

育児をもっと楽に

産後、新生児訪問または、乳児全戸訪問事業(赤ちゃん訪問)を実施し、退院して間もない母親と子供の心身の健康を守るだけでなく、母親の育児支援も行っています。

産後は母親にとって耐えられない育児だけでなく、心身状態・生活環境等が最も変わりやすいことや身近に協力者がいないことで、産後うつになりやすくなります。それを防ぐため、生後4か月までの母子を対象に「ほっと安心産後ルーム」という相談会が週に一回行われ、健康センターに来ていただければ、保健師・助産師が対応し不安などを解消してくれます。ほかにも産後ケア事業や産前産後ヘルパー事業などがあります。これらは母乳や子供のお世話、母親の体調など様々な不安を抱え、家族から支援を受けることが難しい方のための制度です。申請すれば助産師やヘルパーが訪問し、お子さんのお世話や家事を支援してくれるので休息をとることができます。



子供たちのよりよい健康のために…

健康センターは今まで「妊娠期からの切れ目のない支援」の実施を目標とし様々な施策が行われていますが、今後も母親や子供の成長に応じた「切れ目のない支援」を充実させるためにより一層頑張っていきたいとのことでした。健康センターの施策や目標は、SDGsの3番「すべての人に健康と福祉を」、11番「住み続けられる街づくりを」の達成に寄与します。これからも健康センターはよりよい健康を私たちに届けてくれると思います。



名称：滑川市市民健康センター
所在地：滑川市田中新町127

取材 結城孝志朗